
薄荷草

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薄荷草

【コード】

N0441L

【作者名】

ハル

【あらすじ】

山間部の町に越した教師のお話です。

前

物騒がしい都心から山間部の町に居を移して半年経つ。

十も無かった引越し荷物も片付き、少々時代に逆行したような生活にも馴染んだ。

田畑や用水路を挟んで古い土蔵を備えた古民家が点在する土地には、コンビニエンスストアはおろか、飲料水や煙草の自動販売機もない。

人の足で自然と踏み固められたような土の道を多く残す町並み自体、今時となつては珍しいのではないだろうか。娯楽は、といえば、駅前の一軒のラウンジがあるばかりだ。

学生のための遊び場となれば全く見当たらない。

無人駅の隣に構えられた店は、ラウンジといっても自宅と店舗を兼ねた、一見普通の住宅だ。

狭い敷地いっぱい建つ家にありがちな間取りで住居を二階へ上げてしまい、一階が店舗として使われている。古びていても今時のデザインであることと、一般の住宅としては奇抜な、葡萄色で塗装した壁が寂れたバスターミナルでは浮き上がっていた。けれど元より繁華街とは縁遠い生活を送っていた私がこのラウンジに寄つたことは、この半年で一度もない。

県道沿いのホームセンターまで買い物へ行く時に、こうして前の歩道を通るだけだ。

店はおそらく、いつも昼ごろに開けているのだろう。日の高いうちに通りがかかると、囁れた声の『津軽海峡冬景色』が店の外まで届いている事が多かった。

しかしどうも、今日は歌い手が違うようだ。

線路沿いの道まで出てみると、半音外れた『北国の春』が朗々と歌われている。

いつもは閉められていた店の玄関を解放していたので、近づくにつれ、日の差さない暗い店内にマイクを握った白髪の男が覗きはじめる。カウンターに身を乗り出し、ママと思しき中年女性の肩に片方の腕を回している。

どこかで見覚えがある顔だと思ったなら男も私を知っていたようだ。視線をカラオケの画面からこちらへ移すと、「やあ、先生どうも」とマイクを胸に掲げたまま声を張り上げた。

音響装置の立てる耳障りな反響に首をすくめながら、男は頬紅でも刷いたような顔を嬉しげに崩した。

先生という敬称を取り掛かりに、ベージュのスラックスに若草色のシャツを合わせた彼の服装を青い作業服に置き換えてやっと、彼の姿が中学校の用務員ときれいに重なり、正体が知れたのだった。

「これはどうも。羽場さん、でしたよね」

用務員、羽場氏は親しげに頷きながら私を店内へ招き、自分の隣のスツールを示した。ここへ座れと言いたいのだ。別段急ぐ理由もない。招きに応じて席へ着く私を羽場氏とママはべったり寄り添ってみている。

「先生と休日お会いするのも珍しいですな、散歩ですか」

「まあ、そんなところです。ホームセンターへ日用品を見にね。羽場さんはよくここへ来るんですか？」

羽場氏はとろりとした笑みを浮かべ、「ママあ、コーヒー出して。」

ボクと先生のと、ふたあつ」「甘えた声をママに耳打ちしてから、「最近知り合って通い始めるようになりましてねえ」名残惜しそうに肩に回っていた腕を外すと、代わりに彼女の腰に視線を這わせはじめた。

「先生もおコーヒー？　なんでしたら、庭で取れたハーブのお茶も差し上げられますけど」

「ママ、まだ庭に薄荷はっかなんて植えてるのお？」

不満げな声に目を遣れば、羽場氏はママが私に声を掛けた事が気に入らなかつたのか、面白くなさそうに下の唇を突き出している。私は薄荷が苦手であると伝えると、羽場氏の顔にぱつと喜色が浮かんだ。

「ほらあ、ね！　止みなさいよ。それにあれサンデンの薄荷でしょう？　気味が悪いじゃないの、祟られるよお」

「あらやだ、あんな迷信信じちゃうの？」

ママは冗談めかして言うと、ぷっくりとした肉厚の唇を羽場氏に突き出して見せた。唇を出したのは機嫌を損ねたのではなくキスの真似事をしたかつたようだ。二人の惚気に私はすっかり鼻白んできましたが、取りあえずコーヒー代として話に加わることにした。

「サンデンの薄荷というのはなんなんですか？」

目の前に湯気を立てた白いカップが二客並べられた。酸味の強い香りが店内にゆらりと立ち上る。

「五駅向こうに『信乃山裏シノヤマウラ』って駅がありますでしょ？ あの山のことなんです。数字の『三』にお殿様の『殿』で三殿。ここから三時間ぐらいの所にある信乃山駅の登山口が表で、低い山が三つ連なっているんですけど、神様が住んでいるから山の動植物を探るとバチが当たるって言い伝えられているんですよ」

「神隠しだっであつたんだ。ただの噂じゃないよお。むかあし薄荷採りに山に入ったさ、ユシさんとこの一番下の大叔父さん、イチさんとそのお母さんもねえ、帰ってこなかったそうじゃあないの」

「イチさんは足を滑らせて滝に落ちてしまわれたんじゃないかって話ですよ。お母様はほら、土地の人でらっしやらなかったから、イチさんを探し続けて天候の悪い日にまで山へ入っついていかれて遭難なさったんでしょう。あの方はほら、結局はご遺体がお家に戻られたって話じゃないですか。お骨もちゃんと納められているんですもの。まあね、少し前に他所からいらした方が二人、たて続けに見つからなかつたんで変な噂が立つた時期もありますけど」

「山に悪さしてバチが当たつたんだよ」

「そんなこと言っちゃ、イチさんのご親族に悪いわ」

呆れたママの口調に羽場氏がまた口を尖らせたが、僕が置いていかれたような顔をしていたのだろう、慌てた風でこちらへ話しかけてきた。

「まあねえ、とりあえず山のものさえ失敬しなきゃいんですよ。今はハイキングルートが敷いてあつてね、良い山なんです。落葉樹が茂っているからこの時期は特に若葉が青々と美しくてねえ。先生もせっかく近くに越してらしたんだ、一度行かれたらいいですよ」

私は羽場氏が人の良さそうな顔で頷くのを眺めながら沸騰したよ
うなコーヒーの上澄みを啜り、その後延々と信乃山の四季に付いて
氏の講義を受ける羽目になったのだった。

後

ラウンジでの講義に興味を引かれたわけでも、山歩きの趣味があるわけでもなかったが、羽場氏の雑談に付き合つて半月も経つた頃に暇を持て余して納戸を片付けていると、ほとんど使わずしまつていたトレッキングシューズが見つかった。たまに体を動かしてみても悪くない。翌週の休日、私は軽登山の支度を整えて信乃山裏駅の改札から足を踏み出した。民家の間で鳶のように曲がりくねる細い坂道に行くこと約三百メートルで山道に入る。

人気の絶えた登山口の脇にはみすばらしい売店があった。陰気な古民家の土間に棚と保冷庫を入れただけの店内は暗い。引き戸の間から奥に腰掛ける老婆の姿が覗いて見えなければ、営業中とは気づかなかつたくらいだ。

山歩きの供に甘いものを求めて入れば品揃えも悪く、しかも菓子の陳列棚は昔栽培でも盛んだつたのか、件の薄荷製品ばかりが占めていた。私は水色やうす緑色をしたパッケージを指で避け、隅へ追いやられていた小さなミックスドロップスの缶を選んだ。薄荷はここにも混じっているのだけれど、他に味の選択肢があるだけかもしれません。

「お客さ、それでよろしいの？ 百円になりいす」

「ああ。はい、これをお願いします」

廊下の端に座っていた老婆はこの世に暇乞いをするような声で呟き、「あい」と皺深い手のひらを出してくる。そこへ代金を乗せると、ぎゅう、と私の指を握ってきた。

「お客さん、ここいらの薄荷でよろしいの？ わしらの倅せがれと回まわりに、居ないなりいすで」

老婆は薄気味悪く呟くと、聞取れずに「はい？」と声を上げた私にはもう興味が失せたのか「ありいした」と手を離し、それきり見上げようともしなかった。

二、三粒。色とりどりのドロップスを口に含み、私は登山口から山道を登りはじめた。売店で老婆がこの薄荷で良いのかと訊いてきたこと、それに自分の息子の話をしたのは分かったけれど、あとはさっぱり理解できなくて、私は聞き分けられなかった言葉の翻訳を試みながら歩いた。羽場氏やママ、それに生徒達の話し言葉とは随分違う。独特の方言を使う地方では、一定の年齢を超えた人の話し言葉を理解するのに骨を折るが、老婆もそんな感じた。特に最後の「オナイニ、イナイナリスデ」と聞えたところの意味が分からない。「百円になりいす」と言っていたから「ナリス」は「なります」だろう。「デ」は口調から「よ」だろう。

お客さん、この薄荷でいいですか？ うちの息子とオナイニ、イナイなりますよ？

「肝心なところがよく分からないな」

私はドロップスを口に足しながら首をかしげた。

二時間ほどして斜面が途切れると、一面に草花の咲いた草原が広がり、ハイキングルートが山奥へと続いている。羽場氏が推すのも頷ける素晴らしい景色だ。

快晴の空の下、天頂の太陽に干されながら着々とルートを進んでいく。先は谷へ落込む苔生した斜面と落葉樹林に挟まれていた。日向から木陰への境界を越える。肌の上を覆っていた汗とも湿気とも付かない熱が引いて心地よい。

ずっと歩いてきた足取りには疲れも現れはじめており、路傍に切り株を見つけたところで休憩する事にした。ちょうど腰を掛けるにあつらえ向きの高さ、幹周りをしている。

日光にすっかり温められたドロップスの缶を手のひらの上で逆さに振る。すると中から転がり出てきたのは、どれも白い楕円のかたまりばかり。

苦手で避けていた薄荷だ。

「なんだ。これしか残ってないのか」

甘いもの欲しさに負けて口に入れると、すつと鼻に抜けるような独特の臭さが広がる。自分が湿布にでもなった気分だ。他の味が残っていれば、進んで食べたいとも思えない。味を薄めようと水筒の麦茶を含んだ。

温んだ水分が薄荷の臭いを押し流す。不思議な事に飲み下す時、麦茶が冷たく感じられた。

「薄荷を口に入れているからだろうか」

不思議に思っ舌の上にあったドロップスを頬へ追いやり、また麦茶を飲む。生ぬるい。やっぱり薄荷の仕業だ。

ドロップスを舌の上に戻してなお飲みながら息を吸うと、温もった麦茶から熱が失われるような清涼感が生まれる。薄荷のもたらす効果が面白くて、私はしばらく口から息を吸いながら、冷たく感じる麦茶を楽しんだ。

「お茶が冷たいということは、空気も冷たく感じるだろうか」

切り株から腰を上げて深呼吸。やっぱり冷たい。口や頬の存在感が消え、体が山の空気に溶け込むみたいだ。

もう一度呼吸を繰り返す。もう一度。

口を大きく開いて夢中になっていると、ドロップスがころりと喉に転がり落ちた。あっと思ったけれど欠片は既に小さく、飲み込めない大きさではない。胃袋へ落ちてゆく違和感は、差して気にすることもなかった。それより一層大きく息を吸うと、喉から胃まで、すうっと空気と同化するように冷える感じがして面白かった。

薄荷も意外といけるじゃないか。もう一つ。

私は切り株を振り返り、首をかしげた。目に映る光景がどこかおかしい。感覚は確かにあるのに、リュックに向けて伸ばしたはずの自分の手が見えないのだ。手ばかりか、当然視界には入ろう自分の身体をも見ることはできなかった。あるのは口の開いたリュックと歩いてきた山道ばかり。絵葉書を見るような、自分のいない無人の風景。

ラウンジで聞いた二人の会話が頭を掠める。

ずっと胃の腑の縮む思いがして、私は慌てて周囲を見回した。そ

してコースの先へと駆けた。水溜りかなにか、自分の姿を確認できるものが見たかった。けれど、山中でそんなに都合よく姿を映してくれるものなどない。見えない手足を纏れさせるように山道を駆けてようやく、近くの尾根に学生らしい数人のグループを見つけた。ここからも向こうからも、充分人が見分けられる距離だ。幸い遮蔽物もない。山中では登山客同士で挨拶を交わす習慣があるから、こちらから声を掛けても返してくれるだろう。

「おーい！ こんにちはーっ！」

私を見つけてくれ！ 私が存在していることを教えてくれ！ 不安に駆られ、私はあらん限りの声で叫び、見えない両手を振り回した。

「こんにちはー！」

尾根にいた一人の男性がこちらを向くと口の前に手を翳し、返事をくれた。ああ、よかった！ 見つけてくれた！ 自分が消えてしまったのかなんて、どうしてそんな馬鹿なことを私は考えたんだろう。そんな非科学的なこと、ありえないじゃないか。きっと一人で歩いていたら、気持ちが悪く不安にでもなったのだろう。

「こんにちはー！」

私は嬉しくなってもう一度尾根に叫んだ。

「こんにちはー！」

返される声。今度はグループの人たちが口々に応えてくれる。涙が出るほど心細くしていた自分が馬鹿みたいで、喉の奥から笑いが

こみ上げてきた。

中の一人がまた叫んでくれる。

「こんにちはー！ ヤマビコさん！ やっほー！」

山彦。

全身が凍り付いた。彼等に私の姿は見えていないのか。

一団は気が済んだ顔をしてそれぞれ踵を返すと再び尾根を歩き始めた。呆然と膝を折って座り込んだ私に、もう誰も関心を向けてはいない。程なく付近から、また別の声が聞えてきた。見ればこれから向かうはずの峠から、若い女性の二人連れが私の方へ歩いてくる。声を掛けようと、やっこの思いで唇を引き剥がした私の耳に、近付いてくる彼女達の会話がはっきりと届いてきた。

「もっと急いで歩こうよ。この三つめの山って噂があるんでしょ？
気持ち悪いよ」

「やだあ何？ 信じてんの？」

足音がいよいよ近くなり、二人の姿がそびえるほどに近付いてく

る。私は声もなく、ただ瞠目して彼女達を見つめた。

「息子の好きだった薄荷飴をお婆さんから受取ると、山の薄荷にされちゃうんだよね。ほら、ここにも薄荷が生えてるよ。これも元は登山客かもね」

斜面側に居た女性がすれ違いざま、いきなり私の腕を摘んだ。激痛が走る。身を擦ろうとした視界に、丸太ほどもある巨大な指が私の腕を肩からもぎ取る光景が映った。ようやく目に見えた私の腕は緑色をして、人の腕の形を成していない。女性は私の腕を自分の鼻先に当て、「いい匂いがする」と笑いながら通り過ぎてゆく。

「そんなの触るのやめてよ」

「大丈夫だよ。貰った薄荷飴を食べちゃだめなんですよ。大体お婆さんが出るのって登山口じゃない。返事しなきゃいいって聞いたよ」

彼女は隣の女性の指を握ると、「冗談めかして言った。

「お客さん、この山の薄荷が好きなの？ 食べるとうちの息子みたいに消えてしまうよ」

愕然と彼女達の背を見送れば、二人の足向ける緑陰の奥に、冥い目で私を見つめる老婆の姿があった。

後（後書き）

本文は別の投稿サイトでいただいた批評を元に修正させていただき、2010年4月に開催されたそうさく系イベント「そうさく畑」にて無料配布させていただきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0441/>

薄荷草

2010年10月16日00時12分発行